

2019年度 京都大学図書館機構講演会

「オープン・サイテーションと機関リポジトリの展開」アンケート結果

京都大学図書館機構（図書館業務改善推進会議 人材育成部会）

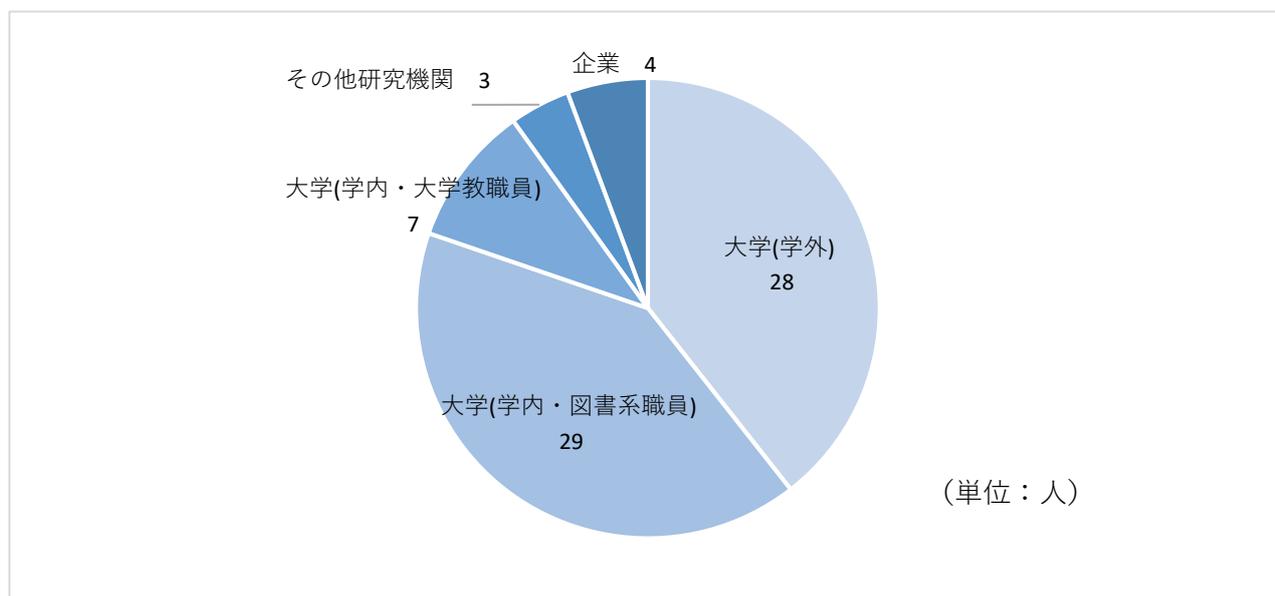
開催日時：令和元(2019)年5月20日（月）13:30～17:00

開催場所：京都大学附属図書館3階 ライブラリホール

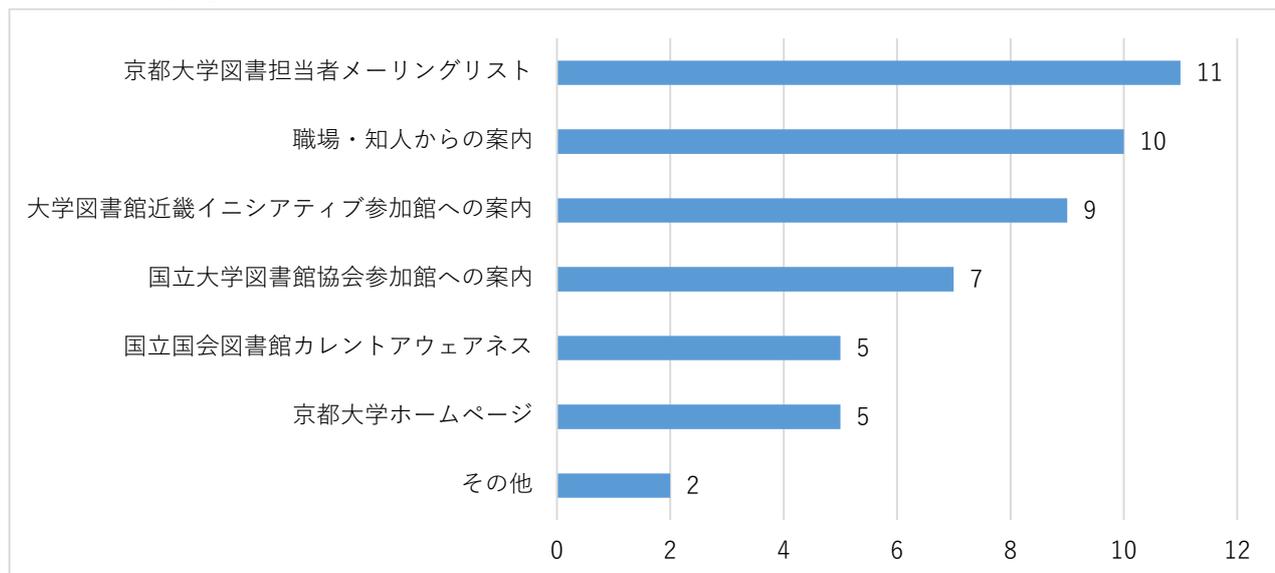
参加者数：71名（学外者：35名、学内者：36名）※講師陣（5名）・スタッフ（7名）を含む

アンケート回答数：40名（回答率61%）

1. 全参加者の所属



2. 本講演会を知った情報源（複数回答可）



その他…各種メーリングリスト、ポスター

3. 各講演内容で「印象に残った一言」とご意見・ご感想

3.1. 報告「日本におけるオープンアクセスとオープン・サイテーションの現状」(西岡 氏)

<p>「学協会の紀要のオープンアクセスは進んでいるが、オープンサイテーションは進んでいない」 非常に詳細な研究で国内の動向をご紹介いただき勉強になりました。</p>
<p>「近年では、日本は意外と引用文献のオープン化が進んでいる」という一言が印象的でした。遅れているものと思っていたので。 現状に対する丁寧な調査とご報告だったと思います。全体としての引用文献のオープン化を進めることは過去の文献をどうするのがキーとなるように感じました。</p>
<p>「オープンアクセスである文献でも引用文献を非公開にしている文献も存在する」 引用文献のオープン化（あるいは非オープンな状態）についてイメージが沸きにくかった。国内雑誌（J-STAGE）・国際雑誌それぞれ、具体例を画像で挙げていただくと、より分かりやすかったのでは。</p>
<p>「オープンアクセスの文献でも、引用文献を非公開にしている文献も存在する。」</p>
<p>「オープンデータで研究評価がされるようになると、人文学系分野が過少評価されかねない」 オープンサイテーションにおけるオープンの意味がよく理解できておりませんでした。オープンアクセスにおけるオープンとは異なることがよく理解できました。また引用データを研究評価指標とした場合の人文学系分野における課題についても認識しました。</p>
<p>「オープンのレベルもいろいろある」</p>
<p>紀要で CrossRef DOI の文献が対象ということで、調査条件としてはかなり限られていると思います。継続して調査する必要があるように思いました。</p>
<p>「引用データのオープン化は RDF 等機械可読なレベルを目指す」 オープンサイテーションの知識がなかったため、最初に概念と日本の現状が知ることができてよい導入となりました。</p>
<p>「引用データをオープンにする主体は著者ではなく出版社であることが多い」</p>
<p>「引用元がオープンにならないと引用先もオープンにならない」 結論はよくわかったが、途中の分析の説明は難しくなかなかついていけなかった</p>
<p>「学術論文のオープンアクセスはオープン化レベルの★1つレベル(高くはない)」 引用データのオープン化について基本用語の概念等を含め、参考になりました。引用データを使った研究を、有料の引用文献データベースを使わずに、オープンな情報だけで行えることが衝撃でした。</p>
<p>「紀要類は、出版社でなく機関リポジトリで公開されることが多い」</p>
<p>「京都大学では残念ながら引用文献がオープンになっていない」 日本のオープンサイテーションの現状について、具体的に説明いただけて勉強になりました。</p>
<p>「京都大学リポジトリではオープンサイテーションは0%」 すでに登録されてしまっているリポジトリから引用情報をどのようにすいあげるか</p>
<p>「出版社が京都大学の雑誌はオープンアクセスが0%だが、引用・被引用文献の公開は0」</p>
<p>「人文学系の引用データのオープン化が遅れている」</p>
<p>「人文学系の文献は他の分野と比較すると引用されにくい」 理系・文系・医学系の論文構造の違いを考慮していくことが今後も必要だと考えました。</p>
<p>「人文学系分野での引用データのオープン化の割合は総じて低い」</p>

やはり人文学系は遅れをとっているなあと思った。
「人文系分野での引用データのオープン化の割合が総じて低い」
「多くの機関リポジトリでは、引用文献・被引用文献へのリンクは付与されていない。」
「大学の出版物はほとんどがオープンアクセスなのに、引用データの公開は進んでいない」 大学出版物についての調査とその結果がとても興味深かったです。学内で出版されたものをただ公開するだけでなく、論文としてのメタデータだけでなく、引用文献のメタデータの整備から考える必要があることを認識しました。
「日本の引用データのオープン化が海外と比較して進んでいない。」 大変参考になる分析をありがとうございました。日本は引用データのオープン化に遅れていることがよく分かりました。オープンアクセス率は他国に比較しても進んでいると言って良い状況との対比が興味深かったです。
「日本の学術出版物の引用文献のオープン化は 18.86%であること」
「論文のオープンアクセスとオープンサイテーションの「オープン」は性質（レベル）が異なる」 日本でもすでにオープンサイテーション対応済の学協会もあると知り驚きました。
「CrossRef に登録されていない引用データは Closed=組織化されていない。」 正直、理解するのが難しいところもありましたが、オープンアクセスとオープンサイテーションではオープンの意味合いが違うことがよくわかりました。元々オープンアクセス誌であればオープン化への権利的なハードルは低いはずなので、誰がどこから手を付ければオープンサイテーションを促進できるのか、西岡先生の分析からのつながりでお話を伺えれば、より理解が深まったように思います。
西岡先生もおっしゃっていたように、データ分析の対象がかなり限定されているので、実際の日本の引用文献のオープン化率は、もっと比較にならないほど低いのではと思いました。
紀要の論文数を考えると、引用情報をメタデータにつけ加えていくことは大変な量の作業になりそうです。
日本のオープンサイテーションの現状を実際のデータを使って分析されていて大変興味深かったです。

3.2. 講演「Open Citations 101 : Historical Background and Current Developments = オープン・サイテーション入門：歴史的背景と最近の動向」（ペローニ 氏）

<p>「Open Citation の5つの原則」</p> <p>オープンサイテーションとは何かがよくわかっていなかったので、5つの原則をお聞きして、ようやくイメージができました。</p>
<p>「open citations principles」</p> <p>オープンサイテーションの原則の説明がとても分かりやすかったです。</p> <p>I4OC などの取り組みの立ち上げからの経緯を聞き、世界でオープンサイテーションの重要性が高まっていることが理解できました。</p>
<p>「Open Citations には5つの条件が必要」</p>
<p>「(Structured, Separate, Open, Identifiable and Available の)5つの原則に合致したものをオープンサイテーションという」</p> <p>今までは、ただ引用文献が表示されていれば十分なのかと思っていたが、それでは不十分だということがわかって驚きました。</p>
<p>「5つの原則」</p> <p>わかりやすく、Open Citation がどういうものでどういう意義があるか理解できたと思う。</p>
<p>「サイテーションデータをオープンにするのは簡単」</p> <p>国際的な動向やプロジェクトの取り組み等の基礎的な部分を丁寧にご説明いただき理解が進みました。後半の具体的な研究内容については理解が追いつかない部分があったので、事前に論文に目を通しておくなど、予習をしておけばよかったと思いました。</p>
<p>「2017年4月から2018年9月にかけての引用データのオープン化の進展(=I4OCのはたらき)」</p>
<p>「Citationとは引用元の論文を評価すること」</p> <p>細部までよく分かりました</p>
<p>「CrossRefよりも多くのデータを提供できている。」</p>
<p>「CrossRef 論文情報の references の55%が現在オープンサイテーション」</p> <p>Citation はウェブ上に公開されていればそれでよいのではと思っていたが、原則に従った公開により得られるメリットについて知ることができました。</p>
<p>「crowdsourced approaches for gathering additional open data」</p> <p>どうしても References をオープンにしない大手商業出版社の壁は厚い、と実感せざるを得ない(スライド:Who is missing)。これまでのオープンアクセス運動と同様、オープンサイテーションについても、研究者とその団体などによる組織的な働きかけ・プレッシャーが必要なものと実感する。</p>
<p>「Let's work together for Open Citations.」</p> <p>"101"にふさわしい講演で、Open Citations の背景・経緯を理解することができました。</p>
<p>「オープンアクセスの出版社がサイテーションをオープンにしていないことに気付いていなかった。」</p> <p>オープンサイテーションデータを使って何かできるかというお話が興味深かった。大学では有料の引用データベースを利用できますが、費用を払って見ても好きにデータを使えなかったり様々な制約があるといったお話によって、その先のデータ活用を可能にするオープンサイテーションの意義というものがうっすらわかったように思います。</p> <p>CrossRef でないといけないわけではないというのも印象に残りました。</p>

<p>「Open Citations のための識別子が開発されている。DORA や Plan S も Open Citations を推奨している。」 Open Citation の役割・可能性について理解が深まりました。</p>
<p>「Open Citations を義務にする」 データのためのデータを作成するのは大変。XML や RDF の知識が必要で論理学やセマンティックウェブの知識が必要なんですね。</p>
<p>「Who is missing」 オープンサイテーションの定義および現状を分かりやすく説明していただけてよかった。</p>
<p>「オープンサイテーションの要件の一つ: 引用データが文献元から分離されていること、追加的なアクセスポイント」</p>
<p>「そもそも出版社側も、オープンサイテーションされていなかったという事実を知らなかった」</p>
<p>「リポジトリに公開する際には、CCO の明確な許可を得るように。」</p>
<p>「引用、被引用のリンクだけではない」 従来の評価指標などで引用数のことばかり聞かされていた図書館職員にとっては目からうろこ。ただし、利用について可能性は分かるがまだイメージが十分に湧いて来ない…</p>
<p>「機関リポジトリ掲載にあたっては、サイテーションの許諾も必要」</p>
<p>「公開の際、引用データについても許諾等必要ということ」</p>
<p>「最後のお願い」 最後のお願いを聞いたとき、初めて、文献と文献のリングではないという意味が氷解しました。 質疑応答時ですが「Citation は Contents ではないので、embargo されるべきではない」という一言が印象的でした。とても先進的な取り組みで、全てを理解したとは言い難いですが、非常に興味深く思いました。今後、日本でもこの取り組みが進んで行くと良いと思います。</p>
<p>「世界的規模の学会が社会的理念を掲げてるにも関わらず、オープンサイテーションの取り組みに参加していない。」 オープンサイテーションとは何か、というところからこれまでの取り組みについてゆっくり話していただいたので、わかりやすかったです。</p>
<p>「非公開の引用データの 1/3 は某大手商業出版社のもの / CROCI を使って下さい(データをオープンに)」</p>
<p>「文献自体は有料 or エンバーゴがあっても、Citation は即時オープン化できる情報である」 I4OC の約 1 年間の活動での目覚ましい成果を実感しました。出版社へ Citation のオープン化を働きかけていらっしやるとのこと、図書館とは別の立場ですが、協同していける組織を知り、今後の可能性を感じました。通訳もわかりやすかったです。</p>
<p>「本題に関係ないですが、冒頭と最後に感謝の言葉を入れられているところが印象的でした。」 ちょっと略語が多い内容を順をおって説明していただきましたので、ついていくことができました。ありがとうございました。</p>
<p>引用データで何ができるのか疑問であったが、オープン化で、様々な利用の場面が出現することに驚いた。</p>
<p>引用データの日本における位置づけ(権利的な面を含めて)を改めて確認したく思いました。</p>
<p>少々むずかしかったが、なかなか興味深いものだった</p>
<p>Open Citation の定義から I4OC の活動内容について基本的な知識を得ることができました。</p>

3.3. 講演に対するコメント「オープン・サイテーションが学術情報流通に与えるインパクトと日本でオープン・サイテーションを促進するために」（佐藤 氏）

<p>「もうすぐ計量書誌学の研究のために有料の引用文献データベースを使わなくていい時代になる」 西岡先生、ペローニ先生の専門に踏み込んだ内容も含めて、かみ砕いて総括的にご説明をいただきテーマ全体について理解が進みました。</p>
<p>「日本の紀要はかなり特異な存在」という一言が印象的でした。」 ペローニ氏の講演に対する補足がありがたかったです。分かりやすく実践的な内容で、とても参考になりました。</p>
<p>「日本の紀要の特異性」 オープンサイテーションの日本における現状と機関リポジトリとの関係、今後目指す方向と課題、普及した場合のメリットが大変よく理解できました。</p>
<p>「日本の紀要の特異性のひとつとして、「フルテキストがほぼオープン」つまりデジタル化されてるもので有料というはほとんどなく、逆にオープンでない場合はそもそも紙しかないという状況」 学会側への啓発が必要なのは確か。今後たとえば論文投稿時に構造化された引用データを著者側に求めるような場合が出てくるとして、参照すべきガイドラインのようなものが策定されていくとよいと思う</p>
<p>「日本の紀要の Citation をオープン化することができるか」 日本の紀要が機関リポジトリで公開されている現状に焦点を当ててくださったので、身近な事例としてわかりやすかったです。</p>
<p>「CrossRef DOI があれば、話は早い」 オープンサイテーションについて、図書館は何ができるか・すべきか考えるきっかけとなるコメントありがとうございます。</p>
<p>「JPCOAR スキーマでも引用情報をすでに記述することができる。」 各大学図書館リポジトリ担当者がオープンサイテーションとどうかかわる可能性があるのか、イメージがわかりました。</p>
<p>「オープンサイテーションが進めば、従来は付与されなかった対象への指標付与が可能になる。」 日本でオープンサイテーションを進めるには、J-STAGE と機関リポジトリにおける尽力が必要であることが、よくわかりました。</p>
<p>「データ源からもれている人にとっては、指標を算出すらしてもらえない。」 次世代リポジトリではサイテーションデータの整備も意識されていないわけではない、ということで、今はジャーナルを出す側(メタデータの作成まで)の立場で、リポジトリの中の仕組みはよくわかりませんが、表に見えるリポジトリの引用データが、今後どうなっていくのか、関心を持っていきたいと思いました。</p>
<p>「引用データのオープン化のためには、投稿規定の改正がベスト。」</p>
<p>「学会側への啓発、紀要の特異性」 実際にどのようにオープンサイテーションを進めていくかについていろいろ考えさせられました。</p>
<p>「機関リポジトリ、特に紀要のオープンサイテーションは大変」 機関リポジトリに携わる立場として、責任を持って考えていかなければならないお話だなと思いました。</p>
<p>「紀要@リポジトリのオープンサイテーション化が問題」 そもそも、オープンサイテーションがどういったものかを初めて知ったので、改めてリポジトリに搭載する紀要データの今後を考える機会になりました。</p>
<p>「紀要においてどう Citation Data をもつか？」</p>

「紀要のオープンサイテーション化が1番難しい」
「高額なDBを契約することなく、Citationから研究動向の分析が可能に。」
「図書館も覚悟を持たないと」 引用データまで手が回らない、という悲鳴が…と思っていたら質疑応答によるとそれ程作業が発生する訳ではないようです。
「遡及データはなんとかなるにしても今後の登録はだれがやることになるのか」
「大手出版社の強制(?)引用について、やはりそういうことがあるのですね。」 研究評価から研究機関評価・大学評価につながるのであれば、リポジトリ由来のオープンサイテーションは現実的に進んでいくのかもしれませんが。
「日本でのオープンサイテーションについて、この機会にいろいろ相談されて、進むはず」
大変分かりやすかったです。あえてあげなかったとおっしゃっていた「誰が作るのか」が一番気になりました。結局最後はそこが一番の問題になるように思います。
日本における現状がすっきりと整理されていて理解ができた。
Citation Geckoの機能
サービス例のCitation geckoをつかえば学生教員への文献検索などに活用できると思った。Open Citationのイメージがしやすかった。
「citation gecko」(このしくみ自体をご教示いただいたことが、大きな発見であった) オープンサイテーションの意義を分かりやすくお話しいただけた。ただ、リポジトリに加え、J-STAGE=JSTも、収録誌のオープンサイテーションを進めるための取り組みを、きちんと認識いただく必要があるのでは。学会にとっては、J-STAGEへの雑誌・論文の登録自体、不必要なほどにハードルを高くしてしまっている、と実感するので。
具体的にリポジトリでどういう取組をしたらいいのか...これからなんですよ。また進捗あればききたいと思います。
Open Citation 普及の意味がわかりやすかった
予測されるオープンサイテーションのインパクトの例が具体的でイメージしやすかったです。
JPCOARスキーマでCitation Dataを表現することが難しいかもしれないというのは少し意外でした。

4. 講演会全般に対する意見等

<p>「オープンサイテーション」という言葉自体がまだ聞き馴染みのない中で、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。特に興味深かったのは、オープンサイテーションの取り組みがジャーナルの OA 化とは別の流れで動いている、ということです。有料の引用文献データベースが一定の質を担保したジャーナルのみを検索対象としているのに対して、オープンサイテーションでは玉石混交となります(それでも出版社でソートするなどすれば一定の質は保証できるかとは思いますが)。今後いかに共存していくのか、一方で有料の引用文献データベースがそうしたオープンなサイテーション情報もオプション的に検索対象とすることで、機能の拡張を望むことができるはずで、研究教育環境の大きな変化をもたらしてくれるものと期待しております。</p>
<p>CrossRef は、出版社のみが利用できるものかと思っていたので、大変勉強になりました。ありがとうございました。</p>
<p>オープンサイテーションの現況、今後の展望など知ることができ、有意義でした。</p>
<p>オープンサイテーションの促進が生むであろうインパクトのひとつとして挙げられたオープンサイテーションに基づく評価指標構築に関して。</p> <p>特に人文学についていうと、他分野に比べて引用されにくいことやそもそも引用のピークを迎えるまでに時間がかかることなどの特殊事情を考慮しつつ、オープンサイテーションの活用がこれらの分野を適切に評価することにつながるという点を具体的に説明(おそらくいくつか紹介のあった引用ネットワーク研究の実例はそうした働きをしよう)できるようになれば、オープン化が特に遅れがちなこれらの学問分野において引用データのオープン化の促進につながると思う。</p>
<p>オープンサイテーションは具体的にどのようにすればよいか、フォーマット化は京都大学では予定されているか例を取り上げてほしい</p>
<p>オープンサイテーションについて正面から取り上げた、日本ではじめてのまとまった企画(個々の研究発表等は別として)だったかと思う。もっとも、オープンサイテーションとリポジトリとを結びつけるには、まだまだハードルが高いと実感する。NII(JAIRO Cloud)などと協働して実装を試みるほか、日本学術会議、文科省 NISTEP など、政策レベルで話をあげていくための取り組みも、いっそう必要になるだろう。</p>
<p>オープンサイテーションのみをテーマにした講演会としては、恐らく日本で初めてのものではなかったでしょうか。大変貴重な機会を設けてくださり、関係者の皆さまに感謝いたします。</p>
<p>オープンサイテーションの概念が図書館司書の間できちんと共有されていない時期に、講演会というかたちで情報に接することができたのは幸いでした。今後の展開を注視したいと思います。</p>
<p>オープンサイテーションを初めて聞いたかと思っていたら I4OC として紹介されていたんですね。理念を理解するのに大変有意義な講演会でした。今後どうするか、投げられた課題を考えてみたいと思います。</p>
<p>機関リポジトリの展開に関する具体的な内容や著作権に関する問題や対応などの情報が知りたかったのですが、参加するにあたり内容をもう少し確認すべきだったかと思います。講演内容は興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。</p>
<p>貴重な機会をありがとうございました。出版社や大学出版局の人たちにもきいてもらいたい話でした。</p>
<p>教員・学生といった研究者の意見も参考として聞いてみたかったです。</p>
<p>講演と報告の順番について、ペローニ先生のご講演のあとで西岡先生の報告を聞く方が、より理解が深まったのではと思いました。オープンサイテーションの定義やこれまでの取り組みを先に聞いたうえで、国内の現状を知る方がわかりやすかったのではないのでしょうか。</p>

最近の講演会では珍しく、全く新しい知識を得ることができました。ありがとうございます。
西岡先生、ペローニ先生ともに、1パートで概略的な説明と専門的に踏み込んだ研究内容の両方をご講演いただいたので、充実しつつもやや過剰な内容に感じました。「オープンサイテーションの概略」で1パート、それを踏まえた研究で1パートくらいの構成の方がバランスはとれていたと思いました。
西岡先生とペローニ先生のご講演の順番は逆のほうが分かりやすかったと思いました。西岡先生の講演は、オープンサイテーションとは何かピンとこないまま聞いていましたので。しかし、今まで全然意識していなかったオープンサイテーションについて概要を知ることができ、何が課題となるかもおぼろげながら分かったので、大変有意義でした。課題は山積していますが、まずは広く知ってもらうことから始めなければと思いました。
日本で CrossRef DOI に限定されると話が進みにくいように思いました。
目新しいテーマでとても勉強になりました。

5. 今後、講演会でとり上げてほしいテーマ等

<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル教科書と著作権の動向 ・ラーニングログや教育データの活用に関する基盤整備、研究動向
オープンサイテーションの今後の動向が気になりますので、続編のようなものがあると大変ありがたく思います。
実際にオープンデータを使用して所属機関のデータ分析をする等のワークショップ
DORA や Leiden manifesto 等、研究評価について
人文社会系分野における研究評価(参照: http://current.ndl.go.jp/e2128)、国際的な大学ランキング (THE や QC)と図書館とのかかわり
Plan S について
Open Citations 101 の関連で RDF やセマンティックウェブについて。インフォプロになるための方法
インパクトファクターとリポジトリとの関係
オープンサイエンス関係